

**豊田郁子さんから：**

レポートの転送、ありがとうございます。とても勉強になります。  
澤木さんが書いてくださったことは、今の私にはとても想像がつかます。  
高山詩穂さん（ゆきさんのコラムに登場した、京都大学病院のナースだった女性です）との出会い、それから、この9年間、新葛飾病院の当事者職員と一緒に生きてきたからです。いつか澤木さんにお会いしたいです。お会いしないとお伝えしきれないからです。でも、もしかしたら私より高山さんのお話を聞いていただいたほうがよいかもしれません。  
今日はこれから四国に行きますので、続きは後日にさせてください。  
澤木さんのレポートは、本当にその通りだと思いました。

\*★\*-----\*★\*-----\*★\*-----\*★\*-----\*★\*

h-MBA2年 11S2030 澤本幸子さんから

10月3日は仕事のため京都にいました。  
ネットで豊田さんのお話を聴き、ホテルで泣いてしまいました。  
遺族も辛い気持ちだと思いますが、医療者側もところが病むくらい辛いものです。  
その場に当事者として立たされた者だけが本当に解るものだと思います。  
この思いをレポートには上手く表現できませんでした。思い出すと辛すぎて・・・とりあえずレポートを送ります。よろしく願いいたします。

\*★\*

患者・家族と医療者間のコミュニケーションが問われているが、それ以前に医療者間のコミュニケーションの大切さを突き付けられるような感覚を覚える講義だった。豊田さんが受けてしまった理貴くんの死と比べることはできないが、医療者側も患者側からカルテ開示や訴訟といったことを突き付けられると非常に追い詰められることとなる。私の体験であるが患者側から内容証明の文書が送られてきて、それを読む時、心臓がドキドキ・バクバクとし身体が震えてしまったことを覚えている。10年以上前になるが今でもその時の感覚は忘れられないものとなっている。

医療訴訟という言葉を知るとその内容証明を受け取った時のバクバクとした感覚が蘇り今でも涙が出てきてしまう。

その時の状況を医師は「自分は検査で忙しかったからその時間は検査対応をしていたので・・・」とした。遺族側は「なにが起こっていたのか知りたい」という気持ちで対応を求めたと思われるが、病院側は「はっきりとしたことが解らないうちに絶対に謝ったりしてはいけない」とし、私達看護師側は何も話

さないように指示をされた。

この件をきっかけとして携わった看護師が心を病み病院を離れた。今でも彼女はカウンセリングを受けている。

この時を振り返るとまさに医療者間のコミュニケーション不足が大きかったと思う。

検査対応をしている医師に対し気を遣い適切な報告ができなかった看護師、看護師間で報告・相談ができなかったのだろうか？他の医師への相談はできなかったのだろうか？

答えは NO である。確かにチーム医療と言われる現在、医師・看護師間のコミュニケーションが必要とされている。しかし現実には本当のチーム医療やコミュニケーションが出来ているとは限らない。感情のコントロールが出来ない医師もいれば 看護師もいる。医師や先輩看護師に対して声を掛けることすらできない看護師もいる。そのような現場で本当の対話ができるようになるのか、“きっかけづくり”が必要な時期にあるのかもしれない。

病院全体の文化を変えるという方向に向かわなければ真のコミュニケーションが取れないのか、真のコミュニケーションが取れなければ病院全体の文化が変わらないのか、どちらが先なのか、正直なところ私にはよく解らない。どちらにしても報告・相談するといったことに対し答えが NO であったことは事実であり、きっとこれからもそういった事がどこかで続いてしまうのではないかと思う。

それに対し今の自分の立場（病棟師長）からスタッフに声をかける文化、空気を感ずる文化、スタッフ間がコミュニケーションを取りやすくなる文化をつくりたいと改めて心から感じた。今だからこそあの時のスタッフの気持ちがよく解るし、仕事を辞めていった彼女の分も取り戻したい何かがある。

謝ることがいつかに繋がると思いたい但实际上にはその人にしか乗り越えられない何かが存在している。その何かを超えられるように支援する時にあってほしいのが組織のバックアップなのかもしれない。

清水先生は本人を全面に出す姿勢をとっていたが、自分を守ってくれるという組織の存在があってこそ出来る術のように感じる。

仕事を辞めていった彼女に対し、私には大きな喪失感が残った。あの時もっとフォロー出来たらとか組織が守ってくれたら・・・と何度も考えた。この思いを繰り返したくないと心の底から思う。何から出来るといったことはまだまだ見えないが、自分の思いをスタッフに素直に伝えることはいくらでも今と同様に継続できる。文化を変えることを意識しながら今よりもステップアップできるように思いを伝えて行きたいと感じた。